



Title	いつも明るい井戸さん、ありがとう！
Author(s)	三浦, 康代
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 35-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

いつも明るい井戸さん、ありがとう！

三浦 康代

元奈良学園大学保健医療学部教授

山森晶子さんが大阪市西成区保健福祉センター保健師として、2019年のあいりんでの「結核に関する認識調査」の打ち合わせの時にご出席された時にはじめて、山森さんが井戸さんの娘さんだということがわかり、私はびっくりしました。親子で結核対策に関わっておられたのですね。

井戸さんが何の前触れもなく彼岸へ旅立たれて、本当に残念でなりません。私ですらこの状態ですので、ご家族様におかれましてはさぞご憔悴のことと存じます。

井戸さんに教えていただいたことは山のようにあります。

私が2009年に白鳳女子短大にいた時に、大阪府保健師OBの清水多實子教授の発案で、あいりんでの保健師実習が始まりました。実習前には逢坂隆子先生にご講義をいただきました。実習初日は「HESO」の事務所で井戸さんの説明から始まり、「ふるさとの家」では利用者の健康相談をさせていただき、「大阪自彊館三徳寮」「臨時夜間緊急避難所（シェルター）」「新今宮文庫」「三角公園」「自転車リサイクルプラザ」等にも引率していただきました。井戸さんはあいりんの商店街のど真ん中で、薬物密売人らしき人の行動を遠くから見つけ、危険を承知で学生に説明をされていました。密売人や客の逮捕者の3割が生活保護受給者であり、あいりんはまさに日本の公衆衛生問題の吹き溜まりのような街であり、保健師学生にはこの上ない学びの街でもありました。それが私と井戸さんとの出会いでした。以来、逢坂隆子先生代表の科研「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摶の推進に関する研究」（2010～2012年度）で、あいりんの支援団体への聞き取り調査にも関わらせていただき、井戸さんらと共にサポートティブハウス等の見学や聞き取りもさせていただきました。トップ結核パートナーシップ関西の研修では、井戸さんはいつも多くの保健師に取り囲まれて大人気でした。

あいりんでの実習最終日に、井戸さんは学生に「飛田っていうところ知ってるか？興味のある人は私に黙って着いてきたらいいよ。興味本位だけならお断りだよ。」とおっしゃいました。学生たちは飛田経由で天王寺駅から帰るグループと新今宮駅から帰るグループの二手に分かれたようでした。私は教員として責任がありましたし、飛田って初耳だったので、井戸さんの後ろについて行きました。やはり予想通りのところでした。開放された玄関の上がり框にはきれいなピンクのドレスを着た若い娘がすわり、その横に高齢の女性が座っていました。若い娘のほうにライトが当たり、その一帯だけが妖艶な世界で、今も合法的に売春が行われているとのことでした。私は何も見なかつたかのように下を向いて通り過ぎ、学生たちが無事に天王寺駅に着いたときはホッとしたものでした。

明治国際医療大学にいたときも、井戸さんに「西成市民館」の釜学講座をご紹介いただき、保健師学生をあいりんへ引率する機会を与えていただきました。

また、井戸さんは大阪社会医療センターでの結核勉強会がどんなに夜遅く終わっても、「まだこれからDOTSがあるから」と言って、あいりんの結核患者の服薬支援訪問に行っておられました。

こんなこともありました。2012年の日本公衆衛生学会に山口へ行った時に、ロボットが年齢を当てるコーナーが人気でした。井戸さんが前に立つと、ロボットは困ってしまい、考えた末に、「年齢はわかりません」とロボットが答えました。井戸さんも、周りで見ていた参加者たちも大笑いでした。何回か挑戦されていましたが、ロボットは悩むばかりでした。思い出すのは井戸さんの笑顔ばかりです。それにいつもきれい好きな方で、HESOの事務所の床はいつもピカピカでした。

井戸さんの大阪府定年退職後の活躍は、そのままあいりんの結核罹患率が低下した時期と一致していると思います。井戸さんが退職された時期と、私が保健師から教員になった時期がたまたま同じ頃だったことは、私があいりんを知る上で結果的にラッキーなことでした。私は井戸さんの進言のおかげで2013年と2019年に「釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査」の分析をさせていただくことができました。おかげで、遅咲きの教授になることもできました。今、井戸さんを失い、定年退職後の自分の立ち位置でできることは何かと考えた結果、井戸さんの結核撲滅への思いと社会的に弱い立場の人への支援の連携やボランティア精神、それらを微力ながら大学や専門学校の学生たちに伝え残すしかないという結論に達しました。あいりんでのDOTSの影武者であった井戸さんの活動や生き方はこれから多くの人に語り継がれると思います。井戸さん、ありがとうございました。やすらかに・・・

合掌



1960年代の大阪市福島保健所の巡回結核健康診断
・血液型検査受付風景（写真提供：三浦康代）



第7回 ワークショップI受付風景(2020年1月)
(写真撮影：井戸武實)



ストップ結核パートナーシップ関西の会場で、大阪公衆衛生協会が結核予防会のグッズを販売しているコーナーがあった時代がありました。私がstop TBのシールを買うと、井戸さんがニコッとして「そのシールね、上下逆にするとdotsと読めるよ」と教えてくださいました。保健師たちが「なるほど」と集まってきました。私はシールを携帯電話に貼って愛用していました。



「検診は まわりの人への 思いやり」三浦 康代 「結核ゼロ そう言える日が きっとくる」南 麗子
(奈良市保健所結核川柳作品展で入選した保健師の句) (2005年)